

日本国際経済学会 第 85 回全国大会 報告要旨
「東アジア生産ネットワークの深化過程に関する考察
—中間財貿易関係の多様化と再編を ROI 指標から捉える—」

DONG Jiaqi (立命館大学博士後期課程経済学専攻)

東アジアでは、中間財の国境を越えた取引を通じて、生産工程が複数の国・地域にまたがる生産ネットワークが形成されてきた。GVC 研究では、付加価値の流れから各国・地域の国際分業上の位置とその変化が分析されてきたが、その背後にある個々の「品目—相手国」の貿易関係の形成・消滅までは捉えられない。本報告では、東アジア生産ネットワークの長期的な変化を、貿易関係の構造とその形成・消滅から検討する。

分析には 1996～2024 年の UN Comtrade データを用い、日本、中国、韓国、香港、台湾および ASEAN9 か国を対象とする。HS1996 の 6 桁品目を BEC 第 5 版と接続し、財の用途を分類した。まず、輸出入取引数、貿易品目数、貿易相手国数、財あたり平均貿易相手国数から中間財貿易の構造を確認する。次に、井尻 (2023) の Revealed Offshoring Index (ROI) を用い、「新しい貿易」と「失われた貿易」から、生産活動の再配置に伴う貿易関係の形成・消滅を分析する。

基礎指標から、中間財の輸出入取引数が長期的に増加する一方、貿易品目数や貿易相手国数の変化は比較的小さく、財あたり平均貿易相手国数は多くの国・地域で上昇していることが確認された。すなわち、中間財貿易関係は、同一の品目がより多くの相手国と結びつくことで、「中間財品目—相手国」の組合せが多様化する形で拡大してきた。

一方、貿易関係数を基準とした ROI1～ROI3 は、2000 年代前半以降、長期的に低下しており、とりわけ中国ではその低下が相対的に大きい。中間財生産の海外移転に伴う関係変化まで対象とする ROI3 でも同様の傾向がみられるが、2020 年前後からは一部の国・地域で従来とは異なる動きが確認される。金額ベースの ROI4～ROI6 は年次変動が大きく、関係形成・消滅の広がりや貿易額の規模は必ずしも一致しない。

以上から、東アジアでは中間財の「品目—相手国」関係が拡大・多様化する一方、新たに形成・消滅する貿易関係が既存のネットワーク全体に占める比重は長期的に低下してきた。したがって、ROI の低下を生産ネットワークの縮小と捉えるのではなく、ネットワーク全体の拡大と、その内部で生じる関係形成・消滅の変化を区別して捉える必要がある。